

ルネッサンススピーチ

2004年8月1日 全国高等学校柔道選手権（インターハイ・広島県呉市）

紹介を頂いた全柔連ルネッサンス委員会委員の濱田初幸です。

このルネッサンス活動も今や国内だけでなく、海外でも注目を浴びようになり、国際的な広がりを見せつつあります。今年は「みんな柔道をしようよ」という新しいポスターを作製し、また以前から大会会場に掲示してある、「柔道はマナーで一本」、「来たときよりも美しく」などに加えて、新しい標語を小学生を対象に募集しました。800あまりの応募があり、「礼儀は僕らの得意技」、「柔道で世界のみんなと友達に」などが優秀作品に選ばれましたが、どの標語も柔道の創設者、嘉納師範が目指した原点をよく表しているものばかりでした。先日、全国中学生大会の際、中学の指導者、選手に対してアンケートをとりました。その結果、柔道は教育的効果があるかといった問いに対して、選手の86%があると回答しています。しかし10%の選手は否定的な回答をしています。嘉納師範は教育的効果があることから柔道を創作しました。嘉納師範は、柔道修業の目的を論じる中で「柔道に上中下三段の別あり」と唱えています。「下段」とは攻撃防御の練習、柔道の技術のみを習得することであり、勝敗のみに捉われている段階でこれを一番下に見ています。次の「中段」とは、稽古、練習によって身体や精神を修養し、人間力を高めるものを中段の柔道であるといっています。最も高いレベルにある「上段」とは、下段・中段の柔道によって得たもの、柔道で学んだことを社会で役立つようにすること、そして社会に貢献することであるとし、この上段を目指すべきであると説いています（大正7年7月）。

柔道を通して学んだこと、得たもの、道場で先生に教えてもらったことを道場を離れて社会に出て役立てよう、「道場外これ道場」ということです。今日ここに参加している高校生が道場で学んだこと、柔道で身につけたことを社会で活かし、柔道を体験した人が社会に貢献するようになれば柔道がより発展していくことと考えています。

最近、「JUDO IS MORE THAN SPORT」という言葉を耳にします。柔道は他のスポーツ越える何かがある。その何かとは教育的効果が高いことにあるでしょう。時代が変わっても変えてはならないものもあります。流行に取り残されない感性も大切ですが、いたずらに流行に追随することはいいことではありません。柔道本来の持つ教育的効果を決して見失うことなく、技術向上を目指しながら、嘉納師範が説いた上段の柔道を高校生だけでなく、我々指導者、大人も私を含めて目指していけば柔道がもっとよくなるでしょう。

さあ、いよいよ今年の高校日本一を決める試合が行われます。みんなで熱い声援を送り、また試合を見て多くのことを学びとりましょう。ご静聴有難うございました。